

大学英語教育学会（JACET）中部支部 2017年度秋季定例研究会プログラム

日時：2017年10月21日(土) 14時00分～18時05分

会場：中部大学名古屋キャンパス 6階 大ホール

名古屋市中区千代田 5-14-22 (JR 中央本線「鶴舞」駅名大病院口(北口)下車すぐ)

- 開会挨拶 14時00分～14時05分 支部長 村田泰美(名城大学)
- 研究発表1 14時05分～14時35分 司会 Leah Gilner(文京学院大学)
The Effects of Informing the Quality of Students' Previous Peer Assessment
Sumie Matsuno (Aichi Sangyo University Junior College)
- 研究発表2 14時40分～15時10分 司会 石川有香(名古屋工業大学)
The Effectiveness of Mobile Flashcards in Preparing EFL University Students for the TOEIC
Nicholas Duff, Shota Hayashi, Aya Yamasaki (Kanazawa Institute of Technology)
- 休憩 15時10分～15時20分
- 研究会研究発表 15時20分～16時20分
「伝統文法・生成文法・認知文法に基づく関係節の効果的学習法」
最新言語理論に基づく応用英語文法研究会(中部)
大森裕實(愛知県立大学)
北尾泰幸(愛知大学)
今井隆夫(愛知教育大学：非)
- 休憩 16時20分～16時30分
- 講演会 16時30分～18時00分 司会 大森裕實(愛知県立大学)
「英文学とフィロロジーから大学英語教育を考える」
今林 修(広島大学大学院文学研究科教授)
- 閉会挨拶 18時00分～18時05分 副支部長 佐藤雄大(名古屋外国語大学)

発表概要

研究発表 1

14 時 05 分～14 時 35 分

The Effects of Informing the Quality of Students' Previous Peer Assessment

Sumie Matsuno (Aichi Sangyo University Junior College)

Using Many-Facet Rasch Measurement, the study investigated whether peer assessment could be improved in a Japanese university classroom after informing students how each of them assessed their peers in the previous assessment. The results showed that the students improved their peer assessment from the first to the second presentations. At the second presentation, the raters distinguished the presenters' abilities more effectively, and no misfitting raters were detected. The number of significant biases decreased from the first to second presentations. Regarding bias analysis of rater-item interactions, noteworthy, the raters who were informed about their biases did not make any biases on the second presentation. Moreover, the number of their comments increased. Overall, peer assessment could get better after informing the quality of their previous peer assessment.

研究発表 2

14 時 40 分～15 時 10 分

The Effectiveness of Mobile Flashcards in Preparing EFL University Students for the TOEIC

Nicholas Duff, Shota Hayashi, Aya Yamasaki (Kanazawa Institute of Technology)

With the growing availability of smartphones, many students now have access to mobile vocabulary-learning applications. Despite their accessibility and recognized advantages, little research has been conducted on the effectiveness of mobile flashcard applications as an instructional aid in beginner-level TOEIC courses at college. Consequently, this study aims to investigate the successfulness of Quizlet, a mobile flashcard application, as a tool used both inside and outside the classroom for intentional vocabulary learning in preparing university students for the TOEIC test. The study involved 162 EFL college students and analyzed the pre and post-test scores of control and experimental groups. Analysis of two TOEIC IP test scores indicated comparatively considerable improvement on post-test scores. Post-test surveys also found that students rated Quizlet as an effective means to study vocabulary.

研究会研究発表(最新言語理論に基づく応用英語文法研究会) 15時20分～16時20分

伝統文法・生成文法・認知文法に基づく関係節の効果的学習法

大森裕實(愛知県立大学)

北尾泰幸(愛知大学)

今井隆夫(愛知教育大学:非)

大学英語教育と一口に言っても、大学生の多様化という現在の環境では、その内容は多岐に亘る。しかし、それとは対照的に、高校までの繰り返しのような英語授業に物足りなさを感じている大学生が少なくないことは事実であり、既習の事項でも違った視点から学べば、そこに学びの意味を見出し、有意義に感じるものである。このような背景を念頭に置き、本研究会では、大学レベルの英語教育に求められる言語知識として必要とされることは何かを検討してきた。今回の発表では、その中から関係節を取り巻く問題点と効果的学習モデルを提示し、画一的に陥りがちな学習英文法に対する多元的な方略について考察する。第一発表では、歴史的観点も視野に含めて、現代英語の関係節の文法的特徴と変異を概観するとともに、英語読解(精読)授業で得られたデータの質的分析から、最近の大学生(中上級熟達者)が英語能力試験のリーディング部門で高スコアを獲得できない一因が「関係詞節を随伴する複文構造の不十分な理解」にあることを示唆し、議論の端緒とする。第二発表では、関係節及び後置修飾の学習に関して、認知文法と生成文法という2つの文法理論から、関係節の指導に応用できる点について述べ、認知文法のアプローチに基づく教授法を施したグループと生成文法のアプローチを適用したグループの理解度調査の結果を示しながら、関係節・後置修飾の中には、認知文法と親和性が高い文法項目あるいは生成文法で捉えやすい文法項目といった理論と教授法の適合性があることを示し、その理由について理論的側面と実証的側面から分析し、両理論を絡めた効果的な関係節及び後置修飾の指導法について提案する。

講演

16時30分～18時00分

英文学とフィロロジから大学英語教育を考える

今林 修(広島大学大学院文学研究科教授)

1980年代からでしょうか、文系理系を問わず頻りに大学教員に研究業績が求められるようになってきました。その結果、より特化された専門性が求められ、またそれを自ら求めることによって、それぞれの専門分野での業績が質、量ともに格段に上がってきました。英語文学、英語学、英語教育にかんしても例外ではないでしょう。しかし、いざ「英語を教える」となると、自らの専門ばかりを教えるわけにはいきません。「教える側」には、理論も然り、英語にかんする様々な知見が必要となってきますが、TOEICなどの検定英語の需要に押されて、たとえそれらを熟知していたとしても発揮する機会がなかったのも事実です。本講演では、英文学を題材にして、英語にかんする様々な知見と英語そのものを愛でるフィロロジ的手法の相互作用が、今日の大学での英語教育においていかに大切なかを考えてみたいと思います。

講演会講師紹介

今林 修 (いまはやし おさむ)

広島大学大学院文学研究科欧米文学語学・言語学講座英語学分野教授。英語学理論、英語文体論、文学理論などの知見と、英語史、大規模英語コーパスなどから得られるデータを援用しながらチャールズ・ディケンズの言語・文体研究をおこなっている。また、TEI を利用した大規模英文学アーカイブの構築を企画している。編著書に、『英語のスタイル—教えるための文体論入門』（共編著、研究社：2017）、Language and Style in English Literature（共編著、溪水社：2016）、Aspects of the History of English Language and Literature（共編著、Peter Lang：2010）、Charles Dickens and Literary Dialect（溪水社：2006）などがある。

事務局からのお知らせ

- ☆ 駐車場はございませんので公共交通機関をご利用下さい。
- ☆ 当日、第5回中部支部役員会(12:30～13:30)を行います。役員は同会場6階 609室にご参集下さい。

会場アクセス

JR 中央本線「鶴舞」駅名大病院口(北口)下車徒歩すぐ



定例研究会に関するお問い合わせは、JACET 中部支部事務局までお願いします。

JACET 中部支部事務局:名城大学 藤原康弘研究室内

fujiwara@meijo-u.ac.jp